

一方、「人格」としての「仏」という、近代的な論理もまた明確に内包されていた。

「人格」という概念は、明治二〇年代に翻訳語として定着するが、三〇年代になるとこれが宗教界にも広く浸透し始めた。その典型が、徳の高い「人格」を得るために学ぶべき宗教という語りだが、そうした言説のバリエーションのひとつとして、「仏」こそが理想の「人格」を体現した存在である、といった論法をとる者が少なからずいた。仏教界でも突出した人格者として知られた近角は、その代表的な語り手であった。

日本の近代化の一側面として、仏教が公教育の場から脱落していったという経緯があるが、そこで落ちていったような仏教に対するニーズを、別のかたちで満たすことに成功した一連の宗教運動・言説があった。哲学や歴史学といった近代知のフィリターを前提としつつ、だがそこを通過しきれぬ、しばしば神秘の色彩をともなう超越性をおびた仏教が、公教育とは異なる場で語られていたのである。ただし、それは他方で同時に、公教育で認められた社会・国家的な道徳とも矛盾しないかたちで、あるいはそれを補完するかたちで説かれる必要があった。近角が説いたような「人格」を強調する「仏(教)」の語りは、そうした要請にかなった仏教論であったといえるだろう。

この「人格の仏教」の展開は、従来から「実存的宗教言説」や「仏教(界)の教養化」といった近代宗教論の枠組みで研究されてきた宗教言説・運動の領域に属している。しかし、そうした先行研究のフレームにおいては、近角の提示したような、近代教養にも適合的でありながら、なお近代知には収まりきらな

いような宗教の語りを十分に把握しそこねてきた。伝統宗門に由来する信仰の影響という、日本の仏教をとりまく歴史・社会的な背景についても軽視されてきた。

「人格の仏教」の精神史を緻密に跡づけ、理解することは、仏教の「近代化」(脱神秘化、学問化、国民道徳への同化など)とその「残余」(神秘的宗教性や伝統宗門の力など)の相互作用を読み解くという、近代仏教研究のいまだ十分になしえていない重要な課題を達成するための、ひとつの有効な方法となりえるだろう。

パネルの主旨とまとめ

オリオン・クラウタウ

日本の近代仏教研究の「三柱」、すなわち吉田久一(一九一五―二〇〇五)、柏原祐泉(一九一六―二〇〇二)、池田英俊(一九二九―二〇〇四)らが形成してきた近代仏教史の学説やイメージは、現在、大きく塗り替えられようとしている。ここでは、末木文美士、林淳、吉永進一、大谷栄一らによってとくに二〇〇〇年代から意欲的に提示されている新しい研究内容や枠組みの影響が大きい。本パネルは、そうした先行世代の影響を強くうけた後続の世代に属する報告者たちが、既存の研究では注目されることが少なかったテーマに焦点を当て、従来にならぬ視点から検討することで、この刷新的な動向をさらに推し進めることを目指した。また、現在の近代仏教研究のキーワード

として「チームプレー」が指摘されることがあるが、その具体的な取り組みのひとつとしても本パネルは企画された。

報告者たちの発表に対し、東京大学の島蘭進から各種のコメントが提示された。パネル内容の全体に対しては、そもそも近代仏教とは何なのか、国民国家との関連、とりわけ「日本仏教」としての主体化のあり方をどう理解すべきか、真宗に傾斜した内容が多いが、そこにはどういう意味があるのか、真宗に先駆性をもつというスタンスは、古典的な近代仏教研究の枠組みを踏襲していると思われるが、その点についてはどう差別化できるのか、といった問題が問われた。これに付言して、真宗による思想・運動ではなく、在家日蓮主義が、むしろ近代仏教を代表する思想・運動ではなかったかという大きな仮説も示された。

また各自の発表に対しても質問がなされ、それぞれが応答した。岩田発表に対しては、真宗護法論の形成に三業惑乱が与えた影響は重要なのか、またそれは近代仏教への展開といかに関係するのかと問われた。岩田は三業惑乱が近現代の本願寺教団・教学に与えた影響は大きく、これを起点に近世から近代への転換を考えることが課題であると答えた。繁田発表に対しては、真宗が明治二〇年代監獄に力を集中していったのはなぜか、それは真宗の特徴や近代性と関係があるのかと問われた。繁田は真宗の内在的理解は今後の課題だが、監獄問題は近代的秩序の形成期に重要な位置を占めていたと考えたい、と応答した。クラウタウ発表に対しては、仏教公認運動にみられるような、近代国家に対する伝統宗門の従属的な性格とその限界につ

いて問われた。クラウタウは、かかる運動を単に「従属」ではなく、むしろ当時の国家政策へ強く反発した仏教界の姿を表現するものとして理解すべきであると答えた。碧海発表に対しては、発表の中心である近角と、井上哲次郎や清沢満之や内村鑑三など同時代に影響力のあつた宗教言説の語り手との異同はどう整理できるかと問われた。碧海は同じ真宗仏教でも言葉の選別における相違や、国民道德の評価に関して微妙にズレがあるといった応答をした。

質疑応答に際しては、フロアから示唆深いコメントや質問が投げかけられた。近代仏教のキーワードとしての「在家」という観点を再考していく必要、近代仏教とりわけ真宗の「近代性」を語る研究者自身の「近代性」の反省、あるいは、「辺境」における真宗の役割の大きさをどう考えるか、等々である。島蘭からのコメントも含め、これらの大きな問いに報告者らが十分に答えることはできず、今後の課題とされた。とくにパネル全体にみられる真宗への傾斜の問題に関しては、その批判的な乗り越え、あるいは在家日蓮主義などの意義も十分に包括した新たな近代日本仏教史の語りの構築が、今後求められるであろうことが確認された。